

多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」の活動状況と課題

Activity Status and issues of the Diversity Exchange Salon
"Minna no Hiroba Kirari"山口 由美¹⁾
YAMAGUCHI Yumi人見 優子¹⁾
HITOMI Yuko川瀬 基寛²⁾
KAWASE Motohiro

要 旨

[目的]

多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」(以下、「☆きらり」)は、2022年5月から、地域活動を開始した。本調査は、「☆きらり」の活動の中心的存在である学生運営委員(活動)の活動状況と課題を明らかにすることを目的とし行う。

[調査方法]

「☆きらり」の活動に参加している学生運営委員(活動)に研究依頼・説明書を配布し、補足説明した後、研究への参加の同意を得た。同意の得られた学生運営委員(活動)8名に、インタビュー調査の許可を得て、対面やりモート(zoom)で20分程度の半構造化面接を実施した。

[結果]

学生運営委員(活動)の活動状況は、【多様性のある方の参加】【人と人とのかかわり】【地域の居場所】【活動内容の検討】【活動の方法】【円滑な情報共有】【責任意識】の7つのカテゴリと29のコードに分類された。

「今後したいこと」については、【有効な広報活動】【地域交流の拡大】【学生運営委員(活動)の増員】【参加者の多様性】【多彩な活動内容】【地域の方との活動】【活動方法の工夫】【成長が伴う活動】の8カテゴリ、29のコードに分類された。

[考察・まとめ]

調査結果から以下の4つの内容が示された

- ①活動を継続するためには、今後も円滑な情報共有が望まれる。
- ②今後したいことの実現のためには、学生自身が「地域の一員」であり、「多様性のある人」であることを自覚し、活動に参加することや「☆きらり」の目的を正しく認識することが必要である。
- ③学生運営委員(広報)も地域活動の役割を担い、地域への貢献の一助となっていることが示唆された。学生運営委員(活動)との交流を図り、互いの思いや意見を確認し合うのが必要である。
- ④学生運営委員(活動)はしっかりと活動プロセスを踏まえ、有意義な活動につながるよう目標をもちながら実践していくことが望ましい。

¹⁾ 十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科

Department of Human Welfare, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学 社会情報デザイン学部 社会情報デザイン学科

Department of Social and Information Design, Faculty of Social and Information Design, Jumonji University

I はじめに

多様性交流サロン「みんなのひろば☆きらり」（以下、「☆きらり」）は、2022年5月から、「地域の一人として大学から地域に出て活動する」「多様な人々と交流する場を設ける」ための地域の居場所として、持続可能な地域活動を実施している。「☆きらり」の構成は、全体を統括する「教員実行委員」と「地域実行委員」、活動の中心となる「学生運営委員（活動）」と広報を担当する「学生運営委員（広報）」、地域の方々である。活動場所は、A市とB市が隣接する商店街の借用スペース「Cひろば」で、市を超えて交流を図っている。

2022年度、「☆きらり」の活動実践の振り返り（佐藤：2022）¹⁾を行った。その結果、「学生運営委員（活動）」の実践活動状況「学内連携における活動実践の効果」「地域のニーズを反映した活動」の3側面から課題があげられた。このことから、学生運営委員（活動）と学生運営委員（広報）、地域の方々の3つの側面から「☆きらり」のあり方を検討し（調査1～調査3）、地域における活動効果と「☆きらり」の存在の意義を研究していくこととした。中でも「☆きらり」の活動の中心的な役割を担っている学生運営委員（活動）は、活動の「計画」「準備」「実施」「振り返り」を行う中で、地域の参加者とかかわるだけでなく、実行委員との打ち合わせや学生運営委員（広報）への情報伝達、活動記録の作成などを行う役割も担っている。これらの様々な「☆きらり」の活動を通して、学生が、「主体性、チームワーク、リーダーシップ、協調性、実行力、課題設定、解決能力、想像力、傾聴力、発信力」といった力を身につけていけることが望ましい。

先行研究について、「地域」「ニーズ」「活動」「変化」「学生」「ボランティア」のキーワードで文献検索エンジンCiNii及び医中誌webにて検索し、235件抽出した。そして重複するもの、2012年以前のもの、対象や内容が本研究に適していないもの（実習、建築、就職等）を削除した結果、本研究に関連するものは6件であった。先行研究からは、地域活動が地域への関心の深まりや地域への参加意識へとつながり、きっかけがあれば地域活動への参加を好むこと（羽田野：2014）²⁾、大学生の活動を喜ばしく感じる者がいる一方で、大学生が良いと考える活動を、必ずしも地域も良いと思うわけではないこと（内平：2016）³⁾などがわかった。また、地域活動が学生の社会貢献に関する責任感を強め、事後の振り返りにより具体的な自己意識の変容につながることも示唆されている（岸本：2021）⁴⁾。研究において活動の状況を振り返り、学生運営委員（活動）の活動の効果を明らかにすることで、今後の学生運営委員（活動）の成長を期待するものとなる。

本研究は、調査1～3で構成されるが、今回の調査は、調査1に該当し、調査1では「活動状況と課題」を明らかにし、幅広い「☆きらり」の活動の実践が、学生にどのような効果をもたらしたのかを検討する。そして本調査は調査1-1に位置付け、学生運営委員（活動）の活動状況と課題を明らかにすることを目的とし行う。

II 研究方法

1. 対象者

2022年5月28日～2023年7月29日の「☆きらり」当日の活動に2回以上参加している本学在籍中の学生運営委員（活動）で、本人から同意の得られた8名である。

2. 調査期間

2023年7月26日～2023年8月21日

3. 調査方法

「☆きらり」の活動に参加している学生運営委員（活動）に研究依頼・説明書を配布し、補足説明した後、研究への参加の同意を得た。同意の得られた学生運営委員（活動）8名に、インタビュー調査の許可を得て、対面やリモート（zoom）で20分程度の半構造化面接を実施した。

4. 調査内容

調査内容は①活動の参加回数、②「☆きらり」の活動で行っていること（活動前、活動時、活動後）③「☆きらり」の活動を通して気をつけるようになったことや変わったこと。④印象に残っていることなどである。

5. 倫理的配慮

本研究は、十文字学園女子大学研究倫理委員会の承認（承認番号JEC 2023002）を得た。

調査への協力は自由意志によるものとし、説明し同意を得た。本研究を施行するにあたり、プライバシーと人権の擁護には最大限の配慮をした。

6. 分析方法

インタビューで語られた内容を、逐語録にした。そのインタビューデータを「活動の現状」と「今後どうしたいか」の2つの内容に分類し、佐藤（2020）⁶⁾の質的データ分析法の手順に従ってコード化し、その内容を整理しカテゴリーごとに表にまとめた。

III 結果

1. 調査対象者の概要

表1 学生運営委員（活動）の参加回数

学生運営委員（活動）	A	B	C	D	E	F	G	H
参加回数	7	3	3	9	8	10	5	5

※参加回数は、「☆きらり」（事前・事後に行う運営委員会除く）開催日当日の活動に参加した回数を指す。

2. 分析結果

8名の学生にインタビュー調査で語られた内容を、逐語録にした。逐語録を帰納的アプローチにより分析するために、佐藤（2020）⁵⁾の質的データ分析法の手順に従って、文書データごとにオープン・コーディングを行い、次に焦点的コーディングを行い、コード、カテゴリーを示す2つの表を作成し分類した。

以下、【 】はカテゴリーであることを意味する。

学生運営委員（活動）活動の現状は、【多様性のある方の参加】【人と人とのかかわり】【地域の居場所】【活動内容の検討】【活動の方法】【円滑な情報共有】【責任意識】の7つのカテゴリーと29のコード

表2 学生運営委員（活動）活動の現状

カテゴリー	コード	データ	
多様性のある方の参加	学生運営委員（活動）の参加	初めてサロン活動に参加した/当日参加の運営委員が減っている/活動に参加できる学生が少ない/同じ学科の参加が多く固まってしまう	
	多様性のある地域の人の参加	一つの活動に人が集まった/みんなと一緒に活動ができる/車いすの方との活動ができる/子どもや高齢者が参加した/毎回同じ人が来ている/多世代の人と関わる（参加したことがなかった）/親子で楽しんでいる/地域の大勢の方が集まった /来場者が多かった/男性の参加が少ない/参加者が集まっていない	
人と人のかかわり	意識的なコミュニケーション	意識的なコミュニケーション	
	関わり方を通しての学び	活動を通して人との関わり方を学んだ/子どもと高齢者ではかわり方が違うことを学ぶ/人と関わる難しさ/活動で人と会うことは大事と感じる/実施したことで自信が持てた	
	学生の関わり	平等に接することを心掛ける/明るく楽しく笑顔でいるように心掛ける/関わる際の言葉遣いや態度に気をつける/礼儀を求められる/子どもたちが参加すると刺激になる/子どもたちへの声掛けが難しい/それぞれで対応を変えた	
	地域の方との活動	地域の方の協力して活動/地域の方に協力していただいた/地域の方の協力を実感している/地域の方とあまり協力していない/地域の方とあまり協力した感じが無い/地域の方と直接やり取りはしていない	
	地域の方の関わり	地域の方はやさしい/地域の高齢者がフレンドリーだった/(地域の方を通して)地域の歴史を知る機会となった	
地域の居場所	地域の居場所	毎回同じ人が来ている居場所になっているかも	
活動内容の検討	活動内容が思いつかない	みんなが楽しめる活動を考えたい/案がうかばない/活動内容が思いつかない/(内容について他の人からの意見が少なく)偏りがちである/アイデアができる人に乗っかることが丁度いい、合っている/メンバーから意見がでにくい	
	具体的活動内容	工作の準備(作成)/当日必要なものを一緒に作成した/工作などを中心に行う/自分が紙芝居をした/物作りになっている	
	学生の活動の取り組み	苦手なことにも取り組み/緊張しながらの実施/(活動資金確保のため)武蔵野会賞に応募した/人前で行う	
	大学での学びを生かす	福祉の専門職の学びと関連付けた実施	
	多様性に対応する活動内容	活動内容が偏る/色々な活動ができればいい	
	また行きたいと思える活動内容	また行きたいと思える活動にすることを心掛ける	
	毎月テーマに合わせた活動の準備	毎月テーマに合わせた活動の準備	
活動方法	学生間の日程・連絡調整	日程が合わない/スケジュールをみんなで合わせる事が難しい/会議に参加できなかった/当日の運営委員に限られ、大変/誰が担当するかを聞いてみてみた 連絡を取り合い続けるのが難しい	
	計画立案	その場しのぎで終わらせてきた/長期の計画を立てることを避けていた/少ないメンバーで長期計画をたてるのが難しい/計画に余裕をもつ方がよいと感じる	
	事前準備	活動のための練習を繰り返した/活動のための練習を繰り返した/準備や活動は2年生が中心に行っている/当日そのまま活かせる事前準備をすること/決められることは決めて事前準備をする/準備をして余裕を持つ/指示されて準備している/準備不足	
	状況に合わせた実施	参加者の状況を把握し、活動する/想像していなかったことがおきた	
	役割分担	最近は全員で準備をしている/役割や分担を決めてから活動に臨む/用意するものも分担して決める/担当分けや準備をする/分担担当をした/事前会議で役割分担をする/毎月役割の担当替えをする/全員で行う印象がある/一人でやっているイメージ/分が抱え込みすぎている	
	環境への配慮	安全への配慮/周囲の環境をみる/参加者の環境整備の必要性/周囲の環境をみる/参加者の受け入れ体勢を整える/参加家族が楽しめるような配慮/他の人の目線を考える	
	広報活動	活動をお祭り参加者に伝える 目を引くポスターに変わった/ポスターから地域の方も目線が変わった	
	振り返り	反省を踏まえ次に生かす/反省を踏まえた振り返り	
	円滑な情報共有	記録	活動レポート(記録)をまとめる/記録がわかりやすくなった
		情報共有	全員で共有できるようになった/担当外のことも把握できるようになった/休んでも情報共有ができるようになった/みんなで全体把握できるようになったこと/情報共有がされやすくなったこと/振り返りの共有
振り返り		反省を踏まえ次に生かす/反省を踏まえた振り返り	
責任意識	活動に責任をもつ	地域活動の責任の重さを考える機会になった/活動での責任感を持って役割を果たす	
	活動のための姿勢	準備に力が入った	
	役員としての役割	役員をしている/役員として、教員との連携をとり、メンバーをつなぐように心がける/役員として指示だし/関係機関への活動報告/みんなで行えるようにする/全体を見て判断していくように意識するようになった/計画に余裕をもっておこなった	

表3 学生運営委員（活動）の今後したいこと

カテゴリー	コード	データ
有効な広報活動	学生運営委員（広報）の継続した協力	ポスター作成を継続したい/ポスターの効果がある
	広報の方法を検討したい	呼び込みたい/広報の方法を検討したい
	「☆きらり」の活動の正確な提示	具体的な活動内容を提示していきたい/「☆きらり」の魅力を伝えていきたい/「☆きらり」の認知度を高めたい
地域交流の拡大	地域の方々ともっと交流したい	色々な人とかかわりたい/地域の方ともっとかかわりたい/多世代交流を図りたい/地域の人の輪を広げたい
	地域の方と活動したい	きらりが地域の方のニーズとなるとよい/地域の方と協力して活動できたらよい/地域の方と協力して活動したい/地域の方と活動を盛り上げたい
	地域の居場所にした	地域の居場所になることを感じた
学生運営委員（活動）の増員	学生運営委員（活動）を増やしたい	メンバーを増やしたい/運営委員が入ってほしい
	学生運営委員（活動）を集めたい	活動に参加する委員を募集したい/1年生のうちから参加をすすめたい
参加者の多様性	参加者を集めたい	学校に来ていただきたい/毎回、地域参加者を集めたい/毎月の継続した企画で関心を寄せる
	気軽に参加して欲しい	会ってみよう、交流してみようという気持ちで参加するとよい/気軽に参加する人を増やしたい
	多様な人が参加できるようにしたい	多様な方々が参加できるサロンにしたい/多世代交流を図りたい/子ども・高齢者・障がい者が混ざって活動をしたい/色々な人とかかわりたい/色々な人が参加しやすくする
	活動方針にあった活動にしたい	活動方針と活動を近づけたい
多彩な活動内容	得意なことを活動に活かしたい	学生の得意なことを活かした活動をおこないたい
	他学科の学生がいれば活動内容が広がる	他学科の学生がいれば活動内容が広がる
	今後行いたい具体的な活動がある	健康食を「☆きらり」でも作ることができる/食べ物を作るなどの活動をしたい/一緒に食べたい/趣味を紹介したい/好きな曲を紹介したい/紙芝居などがあれば楽しい/レクリエーションをしたい
	楽しい活動をしたい	楽しむ行事を運営するとよい/楽しい活動を運営したい/みんなが楽しめる活動を考えたい
	多彩な活動をしたい	色々な活動ができたらよい/様々な参加者を集めるための様々な視点での企画が必要/やれることの幅を広げたい/色々な活動に参加する機会としたい
	大学での学びを活かしたい	学んでいることを活かせることがある/大学で学んだことをこうしてみようと思う
地域の方との活動	地域の方と活動したい	きらりが地域の方のニーズとなるとよい/地域の方と協力して活動できたらよい/地域の方と協力して活動したい/地域の方と活動を盛り上げたい
	地域の居場所にした	地域の居場所になることを感じた
	定着させたい	月1回の楽しみを定着させたい
活動方法の工夫	負担を減らしたい	人数を増やして負担を軽減/みんなで分担した方がよい
	方法を変えたい	子どもの発達に応じ方法を変えてもよい
	長期計画を立てて実行することが必要	見通しがわかる長期的な計画をたてる
	個別的な配慮の必要性	個別的な配慮の必要性
	定着させたい	月1回の楽しみを定着させたい
成長が伴う活動	拠点を持ちたい	部室のような拠点を持ちたい
	計画性・計画力を高めたい	計画性・計画力を高めたい
	行動力を高めたい	動く能力を身につけたい

に分類することができた（表2）。

その内容としては、現在行えている活動、行えているものの課題があるものの二側面があった。

「今後したいこと」については、【有効な広報活動】【地域交流の拡大】【学生運営委員（活動）の増員】【参加者の多様性】【多彩な活動内容】【地域の方との活動】【活動方法の工夫】【成長が伴う活動】の8カテゴリー、29のコードに分類された（表3）。

またその内容を見ると、現状行っており継続を希望するもの、現在実施できていないため、今後行いたいものの二側面があった。

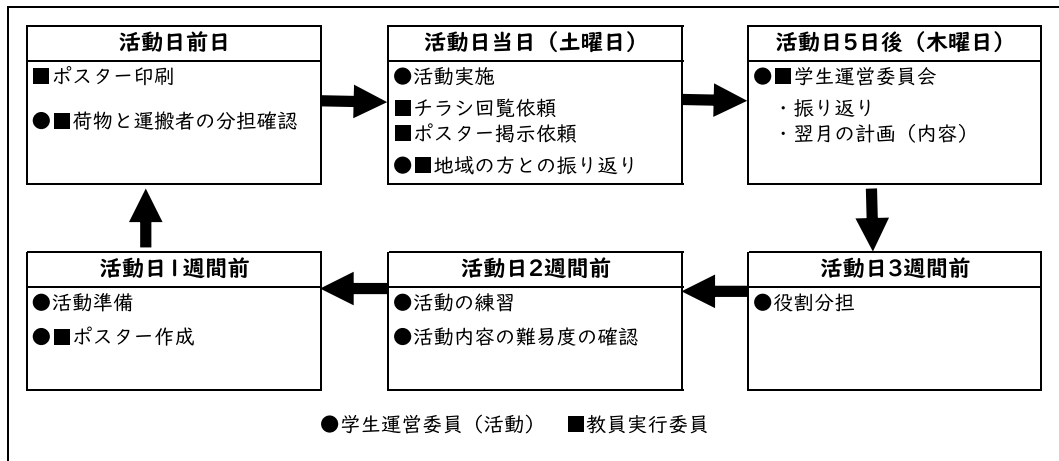


図1 2022年度（2月時点）学生運営委員（活動）の実践プロセス

IV 考察

1. 活動の現状について

多様性交流サロン「☆きらり」における、学生運営委員（活動）の活動の現状について、実践プロセス（佐藤：2023）¹⁾、およびキャリア教育の視点をふまえ考察する。

1) 活動のサイクルについて

「2022年度（令和4年度）地域連携共同研究所研究プロジェクト多世代交流を可能とする地域の居場所づくり報告書」（佐藤：2023）¹⁾では、2022年度（2月時点）学生運営委員（活動）の実践プロセスを以下のように示した（図1）。

学生運営委員（活動）は、活動直後参加者で振り返りを行い、活動日の5日後の学生運営委員会（以下、運営委員会）で、振り返りを共有する。この運営委員会で、翌月の計画を決める。活動日3週間前に役割分担をし、活動日2週間前には活動の練習や内容を確認している。役割を分担しているものの、全員で作業などをすることも多い。

学生の活動について國本（2006）⁶⁾は、学生たちは地域の人との関わりを通して、状況を客観的にとらえていることや、学生自身の対象者をみる目に変化することを述べている。そのことと同様に学生運営委員（活動）は、活動の中で、参加者の状況を客観的にとらえ対応することや地域の方とのかかわりから、様々なことを理解し、関わりに自信をもつようになっている。

また学生運営委員（活動）は、役割分担し活動しているが、一部の学生の負担が大きくなっていることがうかがえた。学生運営委員（活動）が毎月行うことは多くあり、特に役員は手続きなどを担うという面から負担が大きい。他のメンバーもそれに気づき、役員の負担を少なくしたいということを考えているが、何から行ってよいのか戸惑っている様子もうかがえる。今後は、役割を明文化した上で分担し、一人に仕事が偏らないことが課題といえる。

2) 学生間の情報共有や連絡の調整について

学生間の情報共有や連絡調整、記録については以前に比べると【円滑な情報共有】が可能になっている。現在は、前述の通り固定した日時に定期的に運営委員会を行い、振り返りを共有し、次回の活動の役割を分担、分担した役割に責任をもち少人数で活動の準備をすることも可能になっている。

以前の運営委員会は、固定した日程でなかったこともあり、役員からの働きかけに他学生からの応答がないなど、日程や役割の調整に困難さを感じている様子があった。また、運営委員会時の議事が事前に提示されず、運営委員会後に議事録を共有されないことがあった。

現在は、日にちを固定し定期的に学生運営委員会を開催でき、スマートフォン（以下、スマホ）のアプリケーション（以下アプリ）の「LINE」等を活用し、情報を共有しやすくなっている。「☆きらり」の活動において、学生運営委員（活動）が活動を実施・継続する上で、連絡調整や情報共有は重要と考え、連絡調整をスムーズに行うために試行錯誤し、スマホのアプリやパーソナルコンピューター（以下、パソコン）のファイル共有機能などを使い分けて情報共有や連絡の調整を行っている。スマホのアプリの「タイムツリー」は参加者が一目でわかり、連絡がとりやすくなった半面、簡単に欠席を伝えられることから、安易な委員の欠席につながっている様子が見えてくる。ファイルの共有はmicrosoft office 365の「Teams」で行っている。当初は使用しづらいとの意見もあったものの、ファイルを整理するという点から使い続ける中で、情報が共有でき、作成したファイルを保存するには便利であることが認識されるようになった。2023年度の前期の活動から「全体把握できているんじゃないかなって印象です。参加してない回とかでも情報共有とかがされやすくなったので、自分がその次にまた参加する時とかにもわかっている気がします。」と語られているように【円滑な情報共有】や連絡調整が定着しつつあるといえる。

有川（2020）⁷⁾は、「学生がイベントの企画で、事前準備、当日を通して大小様々なトラブルに直面し、事前の情報収集、情報共有、個人の役割の確実な認知の重要性について理解していったようである。」と述べている。

「☆きらり」において、今後も用途別にアプリ等も活用した上で連絡調整をし、スムーズな情報共有を行いながら活動を進めていくことが望まれる。

3) 主体的な活動について

「☆きらり」の活動は【多様性のある人が参加】し、【人と人のかかわり】を楽しみ、【地域の居場所】になっていることがうかがえる。

学生運営委員（活動）たちは、「計画」を立て、参加者を想定して「準備」し、スムーズに「実施」しようとする意欲がみられ、活動に取り組む姿勢には積極性がみられる。しかし、多様な人との関係を広げたいと語るものの、実際には「☆きらり」開催日当日の参加者は少なく、地域の方々との実際のかかわりに消極的な面も見られる。「☆きらり」の活動は、参加する全ての人一人の市民として多様性を理解し、交流を通して地域のニーズを解決する場である。今後も、多様な価値観をもつ学生運営委員（活動）たちが、多様な人のかかわりから様々なことを学び、活動が地域の貢献につながるという意識をもち、しっかりと活動に向き合うことが望まれる。

「☆きらり」の活動からは、学生運営委員（活動）は責任をもつことや役員としての役割を果たす【役割意識】を感じている。「活動に責任感をもって役割を果たす」ことや「地域活動の責任の重さを考える機会になった」ということが語られ活動に責任をもつことがうかがえる。また、「役員としての役割」

として、学生メンバーと教員とをつなぐ役割、活動を大学などに報告をすることやメンバーがみんなで行えるようにする、活動の全体を見て判断することが語られており、活動を継続していくために様々な役割を主体的に担っていることがわかる。「☆きらり」の活動の準備や、活動を通して地域の状況や参加者を理解することが増え、様々な力が身につけていることもうかがえる。

学生にとって大学時代の活動は、今後のキャリア発達に関わる諸能力を身につける上でも重要な活動になる。中央教育審議会が答申した「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会：2011）⁸⁾において、「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力としては、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」「論理的思考力」「創造力」「意欲・態度」「価値観」「専門的な知識・技能等」が挙げられている。

学生たちは、活動において、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」を身につけようとしている。「基礎的・汎用的能力」とは、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「論理的思考力」「創造力」とされている。特に、学生運営委員（活動）の役員たちからは「人間関係をつくること」「課題に対応すること」「論理的思考をすること」に関する言葉が語られている。役員たちは、他の運営委員学生の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることや、自分の置かれている状況を受け止め、課題を解決するために協働しようとする様子が見えたと感じた。一方で、創造的な活動を考えたいという言葉は聞かれなかった。

「キャリア発達にかかわる諸能力」（4領域応力）の開発過程について」（文部科学省：2012）⁹⁾においては、「価値を認めて何かをしようと思ひ、それを行動に移す際に意欲や態度として具体化する」という関係にある。また、価値観には、「なぜ仕事をするのか」「自分の人生の中で仕事や職業をどのように位置付けるか」など、これまでキャリア教育が育成するものとしてきた勤労観・職業観も含んでいる」と書かれている。

「☆きらり」の活動において、「なぜ活動をするのか」や「活動の意義」について、学生運営委員（活動）が考えていけるような教員実行委員からの働きかけが必要であると考えた。

2. 今後したいことと課題について

本調査では、学生運営委員（活動）の「したいこと」についても整理した。報告書（佐藤：2023）¹⁾の実施プロセスを踏まえ考察していく。

1) 学びを活かした有効な広報活動の継続

「☆きらり」の活動は、学生運営委員（活動）と学生運営委員（広報）を中心に実施されている。その中で学生運営委員（広報）の役割は、毎月、地域の回覧版及び活動案内のポスター（チラシ）を作成するといった広報活動である。ポスター（チラシ）作成は、間接的な地域活動への参加ではあるが、学生運営委員（活動）から語られた内容からも、地域の方々と「☆きらり」をつなぐ重要な役割を担っていることがわかった。さらに本調査の結果からは、「ポスターの効果がある」と語られ、学生運営委員（広報）が作成したポスター（チラシ）による地域への働きかけが、有効なものになっていると学生運営委員（活動）が捉えていることを理解した。

ポスター（チラシ）は、「喜ばれるポスター（チラシ）」であると同時に、地域の人から「ポスター（チラシ）はできたか」と心待ちされ、催促されることもあることから、地域に「必要とされるポスター（チラシ）」になっていることが推測される。本調査の中で、学生運営委員（活動）は、今後も学生運営委

員（広報）によるポスター（チラシ）作成の継続を希望している。しかし、現段階では、そのことを学生運営委員（広報）に伝えることはできておらず、ポスター（チラシ）作成を行うこと役割の大きさを意識することや地域貢献している認識を得られていない可能性がある。

先行研究においては、地域貢献といっても上段に構える必要はなく、地域に居住する者としての役割を担うことが大切で、地域と大学・大学生の双方に利点のある活動になり、それが地域貢献のベースになると述べられている（柴田：2014）¹⁰。このことから、大学内での地域のための広報活動は地域貢献につながる事が理解される。今後は、「学内連携における活動実践の効果」（調査2）についても研究を行うが、ポスター（チラシ）の効果を生学生運営委員（広報）に伝え、間接的ながら地域交流の役割を担う一員となっていることを意識付けていくことも必要だと考える。

2) 学生運営委員（活動）の増員の必要性と学生の成長

学生運営委員（活動）の実施プロセス（図1）では、活動当日の学生の参加者数が少ないからこそ、十分な計画と準備を行う事で、当日の負担を減らすことができていた。そして、準備の時間を大切にすることは、学生間の連絡を密にし、準備を通して交流が生まれることにつながり、よい相乗効果がうまれたといえる。通常の大学生活では知り合うことのない仲間と時間を共有し、仲間意識を強め、協力し合うことから、「計画」→「準備」→「実施」→「振り返り」という一連の活動プロセスがうまれたと考える。このサイクルは完全なものではなかったが、「主体的に取り組みたい」という学生の発言や姿勢から育まれてきたと考えている。

しかし学年があがることで、今まで通りの時間の使い方が困難となり、実際には、学生運営委員（活動）の活動参加者数は安定していない。2022年度の参加率は平均0.40で、2023年度は平均0.36と大差はないものの、2023年度は、「☆きらり」開催当日に学生運営委員（活動）が1名しか参加できない日もあった。

学生運営委員（活動）は、活動の主軸となるため、学生運営委員（活動）を「増やしたい」「集めたい」思いがあることは当然である。特に準備段階には集まることができても、実際の活動日には参加しにくい状況にあり、学生を増やすことができていない。

学生運営委員（活動）は、「準備」であれば毎週のように忙しい合間を縫って準備を行っている。大学での準備活動を通して「(大学内に)学生の居場所」ができたともいえる。そのことを示すように「拠点が欲しい」と大学内にスペースの確保を求める内容も語られた。「☆きらり」の拠点は、あくまでも「Cひろば」である。準備活動に偏った活動の結果、本来のサロン活動の目的意識が薄れてきたとも考えられる。

今後は、学生に「☆きらり」の目的意識をもった上で、年間の先々の予定を見通しながら活動計画の具体案を立案し、早めに準備をすることで負担を軽減することが望まれる。この点は、【成長が伴う活動】にも関連し、サロン活動を通して、学生が「計画性」や「行動力」を身につけていけるよう、教員実行委員は、見守っていく必要がある。

3) 地域交流の拡大と多彩な活動の実施について

地域交流と多彩な活動の実施に関するカテゴリーには、【地域交流の拡大】【参加者の多様性】【多彩な活動内容】【活動方法の工夫】【地域の方との活動】があげられる。

学生運営委員（活動）たちは、地域の方々との交流を楽しみ感じながらも、その活動の準備等には

負担を感じ、特に当日の参加に至らなかった。

「☆きらり」の目的は、多様性のある地域の人々が、ぶらっと立ち寄り集える居場所となり、そこから交流が生まれ地域とのつながりを広げていくことであり、「何か活動を行なう事」自体が目的ではない。しかしながら、何もない所にただ立ち寄ることは難しいため、参加のきっかけの一つとして、健康体操やゲーム、物作りなどの活動をおこなっている。先にも述べた通り、学生たちは、具体的な活動を行う事に注視していることがわかった。きっかけとしての【多彩な活動内容】は大切ではあるが、その先に【地域交流の拡大】があり、そのための【活動方法の工夫】を必要とし、【参加者の多様性】【地域の方との活動】が【地域交流の拡大】へとつながっていくことが望ましいだろう。

そもそも多様性とは、社会が年齢、性別、民族、宗教、国籍など多様な背景を有する人々から構成されていることを受け入れ、それぞれが相手の立場の違いを尊重していく姿勢を指す（日本ソーシャルワーク教育学校連盟：2022）¹¹⁾。言い換えれば、地域住民もだが、学生運営委員（活動）も多様性のある者であり、大学という地域に属する地域の人である。【参加者の多様性】を望むのであれば、まずは多様性のある学生運営委員（活動）が地域の一員として参加する姿勢こそが、【参加者の多様性】【地域の方との活動】【地域交流の拡大】【地域の方との活動】を行う第一歩といえるだろう。このように考えていくと、学生運営委員（活動）の地域意識や参加意識など、「☆きらり」への参加姿勢を考え直していくことが必要ではないだろうか。

「☆きらり」は、いわば企画・運営を担っている。2022年度開始直後は、地域住民の「地域運営委員」を募り、一緒に企画・運営をするメンバーを募集したが、希望者がいなかった。土曜日は、家族と過ごしたい方や習い事や塾などの時間にあてているとの声を聞くなど、参加そのものが難しい面があることを理解してきた。また、開始直後には地域の方々のニーズを把握したものの、「各回の参加者から対話の中からニーズを引き出していく」という方法についても、学生運営委員（活動）の参加が安定しない中、意図的なかかわりがなされていないことが、【多彩な活動内容】の語りの内容から理解することができる。

高木（2017）¹²⁾は、福井県の20代の調査の中で、若者の地域活動や社会貢献活動が占める比重は生活する上で決して大きくはないことを述べているが、特に興味深いのは、以下の2点である。

- ・ 地域活動への参加は、20代の若者にとって最も重要な希望である「仕事」に対する展望を広げる効果があり、キャリア教育としての地域活動効果を確認している。
- ・ 地域活動の参加がもたらすポジティブな効果は、女性にとってより重要と考えられ、地域活動に参加する機会を得たことで、自らの地域への関心を高め行動に移したり、職業キャリアに結び付けたりすることができている。

学生たち自身も「☆きらり」の活動に参加する“きっかけ”が必要で、学生運営委員（活動）として活動することが、今後のキャリアに関連していくことが示唆されている。「☆きらり」は、大学教育においても重要な活動の場であることがわかった。

4) 学生運営委員（活動）の役割と活動プロセス

2022年度（3月時点）に学生運営委員（活動）は、活動実践のための一連のプロセスを概ね踏まえるようになった（図1）。中でも特に難航した点は、リーフレット作成であった。学生にとってリーフレット作成は、慣れないパソコンを使用して作業することも大変だが、活動の計画・準備の後回しとなり、活動当日に印刷することも少なくなかった。2023年度は、学生運営委員（広報）の学生が加わり、

「ポスター（チラシ）」作成を行うことになった。その分、学生運営委員（活動）には余裕が生まれ、2023年度（9月時点）には、「活動報告書」「Instagram」への活動報告投稿、「運営委員会議事録の作成」「活動計画書作成」など記録することが、活動プロセスに加わった（図2）。

2023年度（3月時点）には、学生運営委員（活動）（広報）が協働し、プロセスを共にすすめながら、目標をもってそのサイクルに近づけていくことが望ましい（図3）。そのためには、学生運営委員（活

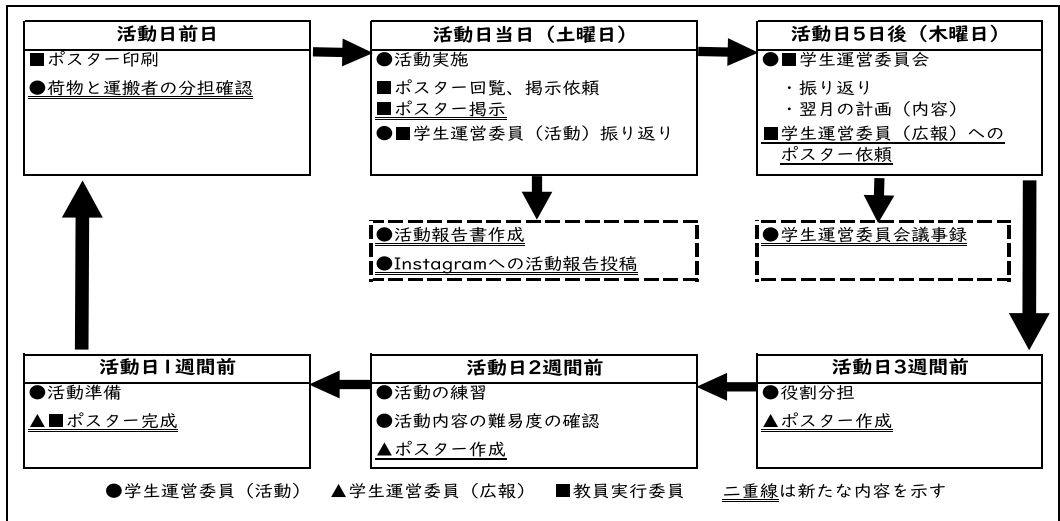


図2 2023年度（9月時点）学生運営委員（活動）の実践プロセス

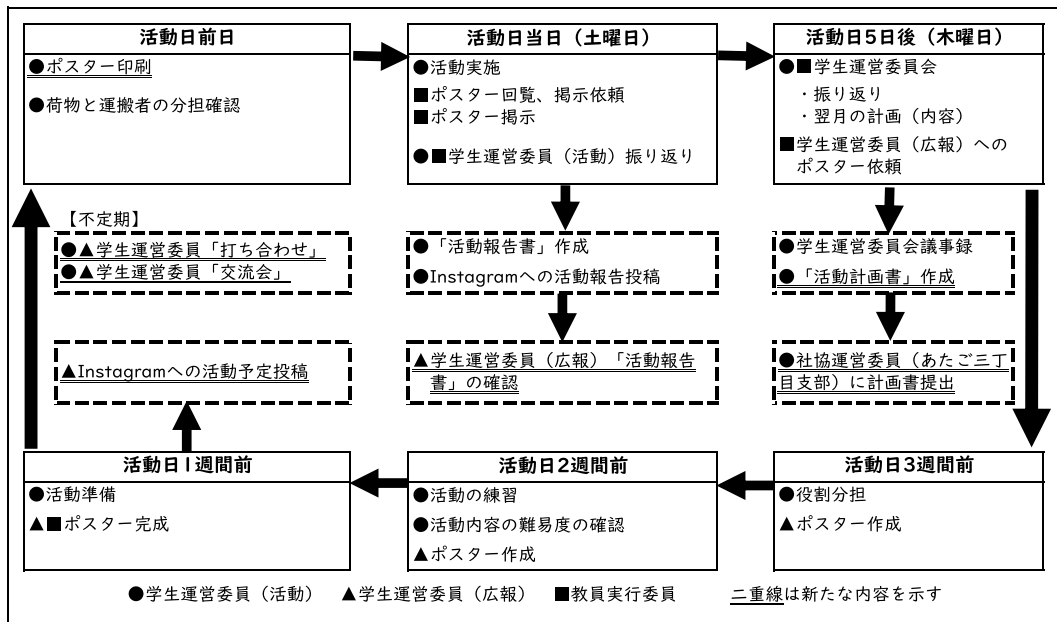


図3 2023年度（3月時点）学生運営委員（活動）の実践プロセス（目標）

動)と学生運営委員(広報)が交流を図り、互いの思いや意見を交換できるような関係を構築するための環境を設定していくことが必要であろう。

3. まとめ

1. 学生運営委員(活動)の「活動の現状」は、【多様性のある方の参加】【人と人とのかかわり】【地域の居場所】【活動内容の検討】【活動の方法】【円滑な情報共有】【責任意識の】7つであった。活動サイクルを回し実施はしているが、課題があることも分かった。学生たちは「☆きらり」に参加する様々な人々と関わり、配慮することや、コミュニケーション、参加者の望むことを考えながら行動し力をつけてきている。地域での活動は学生たちにとって、「☆きらり」の活動は一市民としての生きる力を身につける場になっている。

2. 学生間の日程・連絡調整や円滑な情報共有は、学生運営委員(活動)が協力する上で重要な課題である。役員は学生や教員から意見を聞き、スマホのアプリや、メール、ファイル共有機能を使い分けて使用している。活動を行う上では、情報を共有しなければ、個人の状況がわからず、担当同士で協力することが困難になるため、今後も学生間の連絡を密に取りながら活動を続けることが望まれる。

3. 学生運営委員(活動)の「今後したいこと」の実現のためには、学生自身が「地域の一員」であり、「多様性のある人」であることを自覚し、活動に参加することが必要である。そのためには、「☆きらり」の目的を正しく認識することが必要である。

4. 「☆きらり」は、持続可能な地域活動を実施している。特に学内の連携において、学生運営委員(広報)の【有効な広報活動】への期待が大きいことがわかった。学生運営委員(広報)も地域活動の役割を担い、地域への貢献の一助となっていることが示唆された。今後は、学生運営委員(広報)の意識を調査(調査2)するとともに、学生運営委員(活動)との交流を図り、互いの思いや意見を確認し合ういながらすすめていくことが必要である。

5. 学生運営委員(活動)は学生運営委員(広報)とともに、実施プロセスを踏まえ、活動している。今後は、そのプロセスを目標とし(図3)、実践していくことが望ましい。

V 今後の課題

研究課題としては、調査の対象者が8名と少ない中での分析となったことである。「☆きらり」の学生運営委員(活動)は、今回インタビューを受けてくれた学生よりも多いが、当日の活動に複数回以上参加できていないこともあり、対象者とすることができなかった。今後、今回インタビューをした学生運営委員(活動)が活動を通し、どのように変容したのかについて、調査1-2を実施したいと考えている。

謝辞

本研究に当たり、インタビューに協力していただいた学生運営委員(活動)に深謝申し上げます。みんなのひろば「☆きらり」の活動に協力してくださっている地域実行委員、学生運営委員(広報)、地域の皆様に感謝申し上げます。本研究は十文字学園女子大学2023年度 地域連携共同研究所 地域連携プ

プロジェクトの助成を受けて実施しました。

【引用文献】

- 1) 佐藤陽, 山口由美, 人見優子他 (2023) 「2022年度 (令和4年度) 地域連携共同研究所研究プロジェクト多世代交流を可能とする地域の居場所づくり報告書」. 十文字学園女子大学 ―令和4年度ボランティアセンター「地域ボランティア活動」事業報告. 33-48
- 2) 羽田野慶子 (2014) 「若者と地域活動: 福井市における大学生のまちづくり活動の事例から」 社会科学研究. 65 (1). 97-116
- 3) 内平隆之, 中塚雅也 (2016) 「大学生による地域連携活動の内的効果と評価の枠組み」 農林業問題研究. Journal of Rural Problems. 52 (4). 211-216
https://www.jstage.jst.go.jp/article/arfe/52/4/52_211/_pdf/-char/ja (2023年9月10日閲覧)
- 4) 岸本美紀, 権法珠, 石川博章他 (2021) 「地域における世代間交流活動への参加が教師・保育者をめざす学生の認識に及ぼす影響 その2―活動後の振り返りの効果に着目して―」 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学. 研究紀要. 54. 37-46
<https://okazaki.repo.nii.ac.jp/records/342> (2023年9月10日閲覧)
- 5) 佐藤郁哉 (2020) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』 (第13版) 新曜社: 97-104
- 6) 國本真吾, 板倉一枝, 塩野谷齊他 (2006) 「地域活動を通じた学生の主体形成に関する研究 ―『第8回伯耆の手づくりまつり』 アンケートから―」 鳥取短期大学研究紀要第54号. 7 <https://cygnus.repo.nii.ac.jp/records/188> (2023年9月10日閲覧)
- 7) 有川かおり 「大学生の企画力。実践力を育む教育プログラムの実践と評価―導入教育檀家でのイベント企画の効果と課題に関する検討―」 聖徳大学研究紀要 聖徳大学第31号 聖徳短期大学部 第53号 41-48
- 8) 中央教育審議会 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2023年9月20日閲覧)
- 9) 文部科学省 『「キャリア発達に関わる諸能力 (例) (4 領域応力) の開発過程について』 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/05/21/1320712_04.pdf (2023年9月20日閲覧)
- 10) 柴田雅美 (2014) 「滋賀大学のいま 経済学部『大学生の地域貢献! 防災・避難マップの作成で地域防災に一役!』」 滋賀大学広報誌 第40号. 8-9
- 11) 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (2022) 「障害者福祉」 中央法規出版株式会社. 46
- 12) 高木 朗義, 永井 信明, 杉浦 聡志 (2017) 「大学生の地域活動がまちづくりに及ぼす影響」 グローバルビジネス学会. 1-4

